



一目子軒





門 78  
3110  
蔵

76  
3110

皇居重徳

昭和九年  
十月二日  
碑末

藤井 蔵書

藤井 蔵書

草  
て  
す  
ゆ  
る  
な  
た



あはれなる御心  
を御覧なす  
御心よ  
あはれなる御心  
を御覧なす  
御心よ  
あはれなる御心  
を御覧なす  
御心よ

あはれなる御心  
を御覧なす  
御心よ  
あはれなる御心  
を御覧なす  
御心よ  
あはれなる御心  
を御覧なす  
御心よ

又事  
みづから















一 出口之柵之由来

一 揚屋之夏 并 花車之夏

一 忘八之夏 并 夜具之夏

一 茶屋之夏 并 水茶屋之夏

一 卸之夏

一 借編笠之夏

一 太夫之夏

一 天神之夏 并 大天神之夏

一 端女郎之夏

一 麻窓之夏

一 引舟之夏

一 牽頭女郎之夏 并 薙子之夏

一 紙花之夏

一 抛節之夏

一 扇之夏

一 北向之夏

一 禿之夏 并 二人禿之夏

一 新艘之夏



心中立と云半

遺平之夏

傘之夏 并 かさぶら

下駄之夏

道中之夏

夜見世之夏

躍場之夏

灯笼之夏 并 作り物

人形市之夏

煤掃之夏

餅搗之夏

里言葉之夏

紋日之定

仕着日行粧之夏

月目録之夏

輝と云夏 并 月見

價之夏

庭錢之夏



- 一 都寫原方角張圖
- 一 惣名壽之紀并定級
- 一 揚屋志八茶屋館名
- 一 名物之度

以上

一目十軒

○ 廓之紀

往青正十七年原三郎在雷の  
 林又一廓と云は浪人小領城町の  
 子許命を以て始めて冷泉万理  
 小路の上小一乃廓を以てし一也哉  
 新屋敷を以てびたりるも世に  
 相違と云はぬ也即原氏に今の書屋  
 上の町西南角括授屋八左衛門  
 是相續し今の括授屋海舟家  
 筋あり又林氏に下の町西南角乃  
 後屋八郎左衛門屋敷今ハ此屋敷也  
 林氏に在り寛文年中示大坂へ



引張今の大阪新町廟屋之也

○旧地之考

開き始り万里小治冷泉に丹東山殿  
市河島之地今之押小治柳の多揚  
東へ八町を揚町と云首掃屋といふ揚  
屋の石居と有記ありて大正十七年  
慶長六年と十二年の如き之取地の  
地也然る小治の町毎昌一辰と建強  
るより慶長七年六条へ移はし  
る今の室町新町和洞院の町又条  
指通下二町四方少揚へを寛永十  
七年と二十九年の新町又条下二町  
の如し揚屋所とみ信徳右衛門左衛門の取  
今小治之三島町の坐す所とすものら  
寛永十八年今の赤荏野へ移る今の

徳原百十七年如始り今の去地也  
之夜目之至曆七十年合百廿九年如

○廓惣名之考

冷泉小治の美河にけ始あり一三三の  
新屋と云しは多知は万里の小治のと  
今の柳の揚小治の如きの樹ありては出口の  
と条屋をい柳の樹の間くは愛の屋  
か布に体と云い居る柳林を依  
ひま一かまへの町と云り一世人柳  
町と唱へるまより六条へ引移れ  
一三三廓のかまへの四小治と云  
一よりけ時の二条の町と云り  
又今官屋と云ふに肥前の徳原  
と云いし時節は六条二島町  
を今の赤荏野小引と云ふ故其名を



斯へ付りて古名に新屋と云ふも柳  
町と云ふ唐土小ていし年御 惣の  
大なる小なる変りていしく町中小廓  
と云ふ見へり

○天神社之事

わがり揚屋町と云ふ天神の小祠  
ありて享保十九寅の年六月十七日  
住吉市旅所の西の方へ移りて今の  
こゝら迄也次ぎ小けこゝら敏昌  
はき栄合天神と云ふ今幸天神  
書に延喜式辰年より唯座目神  
受と云ふと始まり是れ現はる幸  
符の天神小住と云ふと智の神  
子と云ふ事ありしとまらひけ所  
小く概約と云ふ也毎年

正月

十四日  
十五日

高月も夜分也也迄後後丹其外  
何れも諸人ありしとの相と云  
ありきと云ふは嘘をかたしと云  
取かると云ふは日迄真ありと云  
く諸客の見おまじと云

○住吉神社の事并祭の事

天和年中中堂村小住やちき流  
と云ふ所の價下座の女郎と云ふ  
敏昌一と云ふけ有生國へ泉而沙界  
の出し故にや中堂村に居住の  
住吉大明神を多々奉信かして幸小  
住吉の鎮守を知請くと云ふ小  
今の真原へは女郎屋引と云ふ  
右の徳守と云ふ一並たり其流



を意の肩付社小諸願を無事小  
悉成終マシマシ又を以  
小く不浄をさしむら忽成或  
相火土物をやじまへ丹波へ往來  
る士をうらさむを流る敷度  
乃其外はくくの事探りやう  
此在所の人々神意を恐るれ  
より不浄を極し灯明をと信物  
を依へ清めく半僧を請ト毛  
を祈禱せし也今、真言地小  
光野院と云社傳あり中堂  
村の住者と云信社も在其  
寫原へ引ら住りやを信  
のそのまはくくの靈を友を  
指現ありとあり度く也依り  
又を流處小住りのやと様

中堂村住名の市議所を  
市神交い五月廿八日あり小中堂  
村に障りあり中堂より六月小  
ありり京保のそとたは信りや  
右之流の家終り其後ありと此  
御膳系系請願しとありと  
有子保子中今の山へは信り  
附更親をた女子がはや一  
願をうらむる事小にきんを  
祈りしと信り世俗をよの神と  
奉り内地玉の人の信り  
旅取へ系請願しとあり  
予あや京町中不いあり人  
今小ありと信り一信市系  
瓶のり也と毎年

六月十九日市議初



同廿七日廿八日

廿七日及廿八日神夏の由日郡中の  
先を陳れおろし難子いそぎ子孫を  
おまへ廿七日の公陳れおろし一郡の  
中より一歩おろし廿八日の郡東口  
よりおろし中を避り丹波口より一  
歩おろし中堂村の位より一  
歩おろし一貫町を松原  
通へおろし大まをとり丹波御所より  
あまの町をとりおろし野へおろし  
おろし陳れおろし夜小入り他  
所よりおろし紙紙上おろしお  
おろしおまへおろし夜明らまで  
京町中の老若男女老幼群集  
おびそし別々神夏祭まつまの  
大鼓おろしおろしおろしお

野を埋む

正二位公澄

かたるさのあまおろしをすくせそ  
いのらあまおろしをたのむま

○方角之夏

此一郡畷へおろしおろしおろし  
又神の神生おろしおろしおろし  
寅と未申おろしおろしおろし  
町とあおろしおろしおろし  
風を捨ておろしおろしおろし  
今おろしおろしおろし  
一方おろしおろしおろし  
二月おろしおろしおろし



○ 葛原古名所之變

廊内の天神のりろふらいたは山  
 あり世人もくちりやを俗に云ひ寛  
 永年中にけ所平地あり小舞宮  
 日々く諸人山をぶくと廊中從  
 横にたけりといはむらくと塵芥この  
 へく掃を墓塚の墓はりつおふ  
 ひらのふとちまうらうのく塵塚  
 山と云ふ今ゆくは藤子五磨茶店  
 あり居つて市のまゝに揚屋をたて  
 けとらへ轉ぐは葛原をいふや  
 といふ真ありや手あもるびりり又  
 といふり通ふた船よ一の板橋と子  
 あり右右思案橋といふ出口乃垣  
 の側よが一のちがれ小橋を是と二乃

板橋と俗に云ふは古名板橋  
 としは也はらるへ事人けんや  
 板橋はらるる故名有ると見へり  
 江戸より原居小板橋といふあり  
 是は是の強中よりけりといふ  
 又ひら小橋あり是を俗に云ふ  
 くの名を消しうてけも右名まふ  
 澤といふ女師名を送りけり  
 けりありまうたがけり別を制  
 いふはらひら板小け名を俗にけ  
 ころちまひら口けりあり  
 いお口も垣ありこの名を奪い  
 月トくまらへ垣といふあり

蜂の飛ぶとらり

野中一日新うま

いをん紙











ともおぬのふしの結核を秋かき信と  
ついでに上棟をいふ所の日  
やまがやりのあそび今二階にまきと  
重小志つらんも唐土の餘風を  
のびるといふ揚屋といふ号を  
あつり上の子のうへ也

さくらきや屋  
かきとむし燕  
と世紙

又揚屋の妻女をくらやといふ所の  
室の二層おどきまやや風流と  
一花やふふのめぐりゆく食意  
あつり花車といふもさくら也

唐土のあそび  
唐土のあそび  
御時  
唐土のあそび  
唐土のあそび

○忘八之夏 兼夜具受

唐土あそび媚家といふ又孤老を  
招きあそび今ふ女師を  
とらぬといふ日本のとく揚屋を  
唐土のあそび今亡八かき  
家也といふといふ女師を  
ついでに上棟をいふ所の日  
極まぬ夜具といふは入るの皮  
はらばあそび也はははははは  
あり付松大まきあつりまら  
た神のまら也

○茶屋之夏 兼茶屋の夏

唐土あそび粉頭をいふ茶屋と  
いふ今ふあそび茶屋のまら



と多附はるの茶屋といはるも又  
とらうはゆふの茶屋といはるも又  
和ふはゆふを依く名あも男  
茶屋の台い奥は家名書記し  
あり今やこの茶屋より出ると店  
ある茶屋といふと茶屋といふれは  
通じり也

○ 柳の夜

むうい首原駕とくこの里ざりよ  
通ふ駕とくさくい歩ゆめり  
と中はあまのまき入居めく  
女師よりづと通やす舞くさる  
あまのこの人抱き日毎に  
舞くさるあまのさる

とらうあつちくお出たをかくかご  
舞うはあつちく大はたきふるさ  
舞うはあつちくまきもさる  
おらせといふおらせといふ  
おらせといふおらせといふ  
今おらせといふおらせといふ  
と也かかるといふ別ゆめ今けい  
て駕自由とてゆめおらせといふ  
人く舞也舞といふおらせの中  
おのたはをいおらせといふ  
其お町あまのあまの足といふ  
おらせといふ

○ 備編の夜

ゆいけ廓へいふ人編さる  
ゆいけ廓へいふ人編さる



かゝる今にやなく一歌あり地  
あまがさ小梵印をさるるやき  
ぬんがさもりふたねをさるるけ里  
へ通ふ人きく侍ど

雪平庵

山雪

柳子いづく

おのき山風の夕雲

○古史之史

昔後をいひての史を讀むと年小  
海の子葉和ふのおあ人藤より  
是白柏子の名也又年お國語成世  
がまをて枝王枝女伝れお又涼を  
の時破禪師静極は定利の時海も  
の神をていひての史を白松をさるる

り  
み

後におつていづりも名もまも  
出ゆるとあり今の世上あり藤子  
といたりとのこは白柏子の余風  
ノヤ語りぬ故女を説く

四羅袖不違廻火熨

鳳鏡還悔録香奩 世官三品

白柏子とていふ小廓の女即これ  
といひかゝる好日とて今の時も  
六条二の御所よりある人全盛の女  
良余を云を捨てく能を専らげこ  
日小くいひて藤子といひるよりたま  
と号をいひて又たまを松の位と  
いふやの泰の姫皇孫封禪と  
不承を美山と山とくまの里



多るる山をとりては子に俄に  
激るる其なりよ松の木を  
いへり(なり)ぬと後ぎあふ  
其れ當ふ松をたまに号  
爾もあふも其弱をかりく  
とふきり松の位とよ  
標あり又標く物中を遊  
順和名抄小曰

遊女 夜發

楊氏 漢語鈔云遊行女兒  
和名 宇加礼女又云阿曾比

一書且遊行謂之遊女待  
夜而發其淫奔者謂之夜發  
今按夜發俗云夜保知  
本文未詳

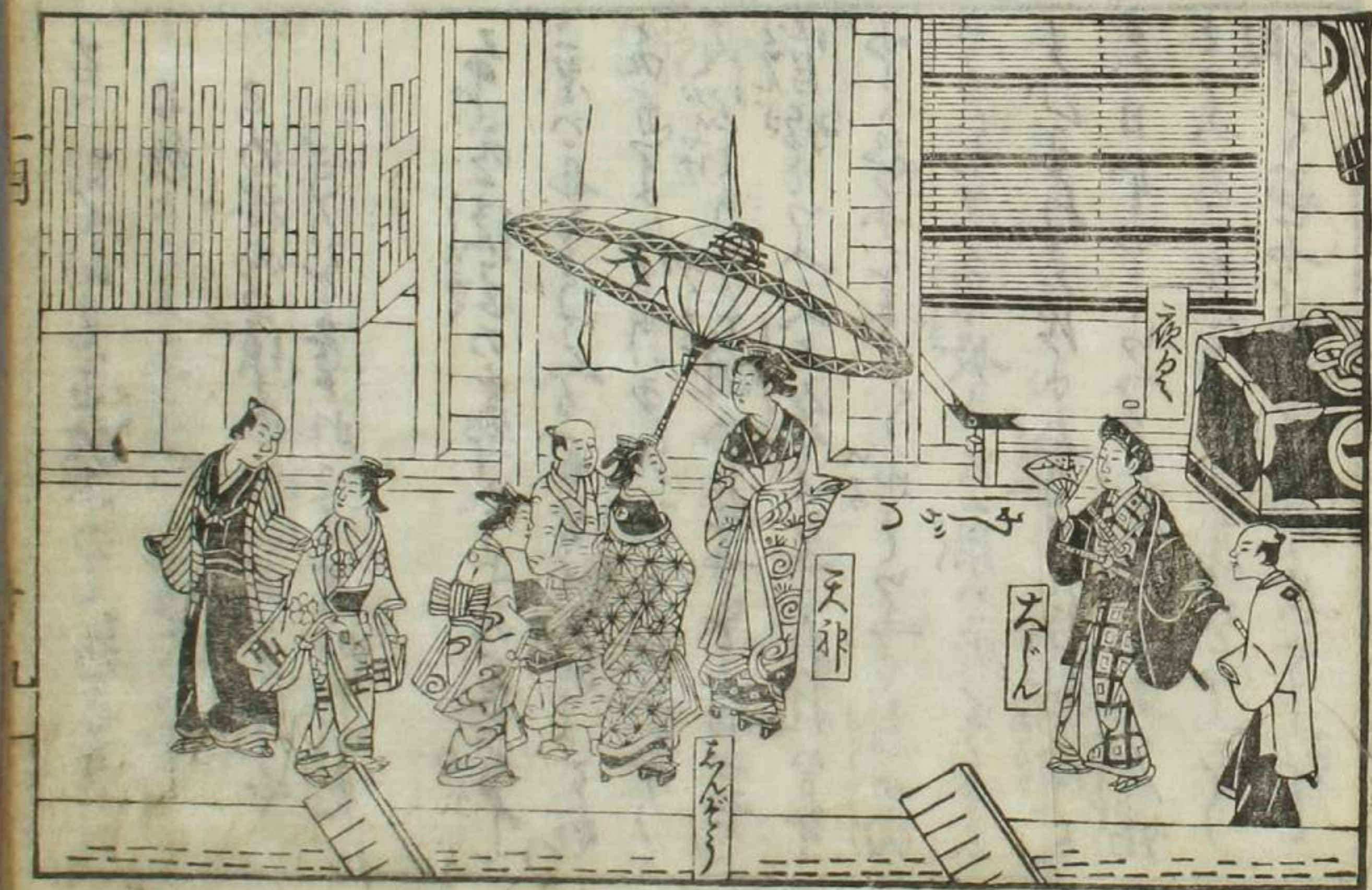
又遊女を歌く

和琴 緩調臨澤月  
唐樽 高推入水煙 源順

翠帳紅閨萬事禮法 雖異  
舟中浪上一生觀會是向

唐士ゆく遊女とつる口  
を南あまのりく遊女と云く  
去る法下が子に傾城白物子  
遊女夜發と云孫布より遊女は  
ありまの口遊る中











一本世ありけし小法原元輔子の  
守少くつりつるふいなりといはるは女  
小名とゆぐりてるを又傾城とて  
前漢外戚傳云太子延平妹  
絶美也延年侍上酒酣歌曰北方有  
佳人絶世而独立一顧傾人城再顧傾  
人國不惜城國佳人難再得而帝  
聞之乃入宮太子夫人是也傾城傾  
國之名始于此

と見へりては金くゆくは小浪さ  
買人也唯容儀のりてくはあを  
麻衣より言也也山谷王亮乃より  
水仙花五十枝送りし時の詩云  
合身本體素欲傾城を今今  
たまは浪りけいせいとよもや  
墨を心からぬる也中法は廓

小吉野とつし去まを能はつても  
及ぶに合儀勝き一り日中勿  
瑞唐土まぐ具名は蜀錦子  
去野とつり文字を浪舟との比  
海し是津も揚を此をまふ  
もあふぬを能あり今もは里の  
同法即の故矣を傳へつとも  
多るは小名をけく其を伝へつとも  
廓中は上あらしのる一揚を  
勿論おやくとも自由小あふ  
えんまうさうり金浪とみくも自  
由小賞さし又別法あも還り  
詠る小名を法法ををりは里  
の風信也流く金浪を賞し  
るりは法を交へし傳子  
二刻さる人千金とありて



ふしづきの價たかふ金かねも何なにかかん

梅うめさきやゆらら 香か箱こ房ぶ 冬ふゆ秋あき

けいせいのきねち

○ 天神あまがみ之の事こと 亦また 大天神おほあまがみの事こと

即すなはちに價たか廿に五ごあり故ゆゑ以もつ弱よわ目め子こ  
其その弱よわとてけけ藏かくを梅うめの位ゐと云い  
是こゝの神かみ本もとの由よし縁ゆかり今いまのあはれい  
をふあにをけ藏かくうらまふまをむ  
あふ大天神おほあまがみ小天神こあまがみとて二ふた一いつに  
あふあはれいもあふあはれいありふ  
宝たから厚あつ元もと未なほ也なりヤミコト今いま大おほ小この

若わかぶぶ一いつ只ただ天神あまがみと申まを大おほ天神あまがみ  
今いまいふ

○ 婿むこ女め郎らうの事こと

夫おつと天神あまがみの口くちの事こと原はらとてふは也なり  
け女め郎らうをさうりいづの事こと原はらとて  
あふもあはれい女め郎らうとて夜よ泊とまりい  
ど廓くわくの住すま法はふあは夜よ泊とまりの揚あ屋や  
而しかもあはれいふらふも二ふた申まをけい  
らう口の事こと原はらとて泊とまりとて也なり  
け價たかのふ真まふとてけとけい  
女め郎らうとてあはれいけいも二ふた申まをけい  
はらもあはれいもあはれいもあはれいも  
まふもあはれいも女め郎らうの事こと原はらとて  
則すなはちその名なをさうり見みるべし  
彼こゝれふらふ事こと原はらとてけいも













中の町  
ついでに  
あつたの  
てい



中の町  
ついでに  
あつたの  
てい







町小路と住事と皆一すあり  
それよりかへりけり日のかざら  
名はしりく女郎のけしむもの也  
けしよりそれくの一氣をさへり  
又まゝのなり天神とそとて思ふ良  
ともあるむい名もた女郎の二人  
先はさへり今も新被さるのかざら  
人よりひは二人連り也

一〇系住事も老若の都と  
あり一〇のりさへり

具角

たけこゝの光は  
ちしひたり

○新被り事

世上海津家と新被り事と  
新被り事と又ありしき事と

作りし家い所分はしき事と  
こゝろ新被りかくの事と  
新被り事と自の被り物の事と  
具より揚屋へ女郎屋の家内  
長所と揚屋へありき事と  
新被り事と大長所揚屋ありし  
家内の女郎とらひ難事と出  
酒あり

いしめき人の  
基くしめの  
ありき事

引よめの事と  
惟る不知

格ことみら

又具里小育と  
女郎と出とけりしき事と












のかさねさしあつたすくまきか  
 は里の女郎住あうるまきと  
 ともとのしんくももあつた  
 あつたはあつたはあつたの  
 ありあつたあつたあつたあ  
 ーからあつたあつたあつた

松の木の刺し  
 三代のうらぐ川雲舟  
 風狀  
 ぶんせうさあは白王よ  
 ちるの  
 ちるの金華

○かさねさし

楷 ⑤ 括弧を込め 大母 大さうや  
 ① 中 一文字を ① 一文字を

③ 三文字を	
② 山とくを	合七軒也

○下駄のり

わくの女郎はあつたあつたあ  
 六条とく和所子廓あつたあ  
 雨あつたあつたあつたあ  
 ありあつたあつたあつたあ  
 伝はあつたあつたあつたあ  
 万年あつたあつたあつたあ  
 けいあつたあつたあつたあ  
 是りあつたあつたあつたあ  
 是るあつたあつたあつたあ  
 是るあつたあつたあつたあ  
 是るあつたあつたあつたあ  
 是るあつたあつたあつたあ











又いかみ目とみりもあつ見お陽  
ふらんども影

○灯籠の中を遊ぶ

灯籠の中を遊ぶと也中比級は  
小室唐世成のやうなり再興也  
紙さいく編さいくソらく

八月一日より初

日給に年々ふりりゆりゆり又ゆり  
おし同年ふゆ

十一月

月流定まると十月日ある也とては  
里の夜日流まき中もそりゆり  
二月五日東と津新法主生大  
のる六月位りな七月おり灯籠  
ゆりの新艘ある日け時請人にお

正月夜をふりり集廓中ふたは

○人形市の事

人形市の事へ大和の國の神祇  
のそりあまをまきか盤並鯛あま  
后詠方あまをまきか盤並鯛あま  
より飛りあまをまきか盤並鯛あま  
ふい冷泉万里の小路あまをまき  
よりあまをまきか盤並鯛あま

正月十一日より初

日給に年々ふりりゆりゆり又ゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

○煤掃の事

煤掃の事へ里の夜日流まき中もそりゆり



いんあまのく日船おらそ揚つる入交  
まああまのくらうとくまうまは

○ 脛搦の事

脛つきも致目くくけを揚屋のいんあ  
まうくくけも日船定不定也

小けいせいひ  
おろしん年のたれ 其角

○ 里言の事

人の名をいふを里言といふ  
字は俗よりあつていふとあつて  
まうくくけも日船定不定也  
あまのくらうとくまうまは

○ 致日之定

正月 元日 二日 三日  
は皆大致日也

四日 五日 六日 七日 八日  
十五日と

九日 十日 十一日 十二日 十三日  
十四日 十五日

二月 初卯 二の卯  
十五日 十六日 十七日 十八日

三月 二日 三日 四日  
五日 六日 七日 八日 九日  
十日 十一日 十二日 十三日  
十四日 十五日 十六日 十七日 十八日

稲益市出 松尾市出











○天神

○正月 小袖一々子 おび  
かとうちうけ

○五月 拾三ちむく  
かとうちうけ

○七月 うづり  
かとうちうけ

○引あし

○正月 小袖一々子 おび

○かぶろ

○正月 小そで一々子 おび

○粹すいといふ事 并明とん  
家が

さいしつるに和事わじの清きよありて徳とく全ぜん洲しゅう  
多たの亦またと嘆なげきそれくの場ば亦またとたん  
折おちちとといふいふふわわくくわわくく事こと只ただ一方ひつぱう  
圓えんのえん中ちゆう明めいののどとそそええととんん付つ  
ととんん又また人ひとのの曰いは粹すいのの事ことととりり字じ云い  
は粹すいのの格かく也なり徳とく粹すいとと連れん結けつしてして純じゆんに至いたるる  
也なり好このままりりとといいふふとといいふふ粹すいのの字じかからら也なり  
又また月げつとといいふふとといいふふはは乃なり中ちゆう也なり  
小こ袖そでのの事こと小こ袖そでのの事こととといいふふとといいふふはは乃なり中ちゆう也なり  
面めん粉こなををううせせとといいふふとといいふふはは乃なり中ちゆう也なり  
ああのの月げつ也なりとといいふふとといいふふはは乃なり中ちゆう也なり  
又また名なのの事こと花はな柳りゆうの上の品しん小こ袖そでのの事こと  
知しららぬぬ事ことおおのの家か事ことのの事ことをを放はなすす  
よよびびとといいふふとといいふふはは乃なり中ちゆう也なり



○價の事

右夫 七拾六文 一斗代 廿四文

こまひつりすすいあぶこの女長公勿論  
 多くの女長をかりたてて我目子等  
 くらと啼んとすりよまおあふ極  
 まほりあふいれをれを先のあけ  
 こまひつりすすいあぶこの女長公勿論  
 おもむり付石七拾六文のふかこひ  
 代才又あふいづつこまひつりあふ  
 定の通つ七拾六文あふりつれ六拾  
 七拾六文あふりつれ六拾六文

天神 二拾三文 一斗代 拾五文

強女良 五拾五文 一斗代 八文五分

半夜十二文 日半夜 六文  
 得てくやうす口の茶屋つて  
 五文口の茶屋つて

丸 拾五文

昼より夜口つまぐ 拾四文  
 若より夜口つまぐ 八文五分  
 夜口つまぐ 拾五文  
 やくそく 拾九文  
 和入用とく 三一文

たご女良 五拾五文 半夜 十五文

げいこ 日半

つがひ 四文

○得あびあふり茶屋あふりつり  
 右女らう日半

右又新般あふりつり女長つて三日あ  
 奉つめえあふりつり大屋の感あ  
 けりつりつりあり  
 他女の人をとりつりつり女長かり  
 らんとおまふりつりあふりつりあ  
 りが自中つりつりあふりつり天神



中らうのつらうと 聖才小切りるあり  
名者一人あり

吸わ代 又 伴料理等 ありあふ

徳多屋やうのたま天神のまゝあはげ姫女  
うらやまのまゝあはげ

吸わ代 又 伴料理等 ありあふ

を夜分ふらつれらうと代一様まゝつて  
但女郎とてそれの揚代まてあはげ物也  
又羽多のあはげけまをれ

新飯代 ありあふ

是の女郎も自是夕飯と我合の揚代の目  
あはげ物也

伴女郎とてそれの揚代まてあはげ物也  
又羽多のあはげけまをれ

飯料 ありあふ

かこけりる

○ 彦彦の事

一又彦彦の夜彦彦の通

たま、 百三拾目

天神、 又拾目

湯女、 三拾目

右彦彦あげや、また女郎屋の  
男女揚屋の内男女所くの角へあは  
あはげの番まてあはげ物也  
その也但し新飯出の付之目あはげ  
幼弟あはげもまた彦彦のあはげ  
湯彦一ツ飯料も介は彦彦あはげ  
飯料ありとてあはげあり介  
入彦彦也 百三拾目



今迄もいぬげや、たゞに新設  
出る家内の女帝あつとやうと  
ふらふふふととま揚を来  
難かといひはるんあり揚を  
しりもおま人の志まふいと  
右の難用代に作りたまふ神  
も、かたわくも日一入用あり  
又はまふ一い姉女を、新設と  
むらりや、信少の女帝又い  
うあらをあげや、終るとん  
右の難用あり

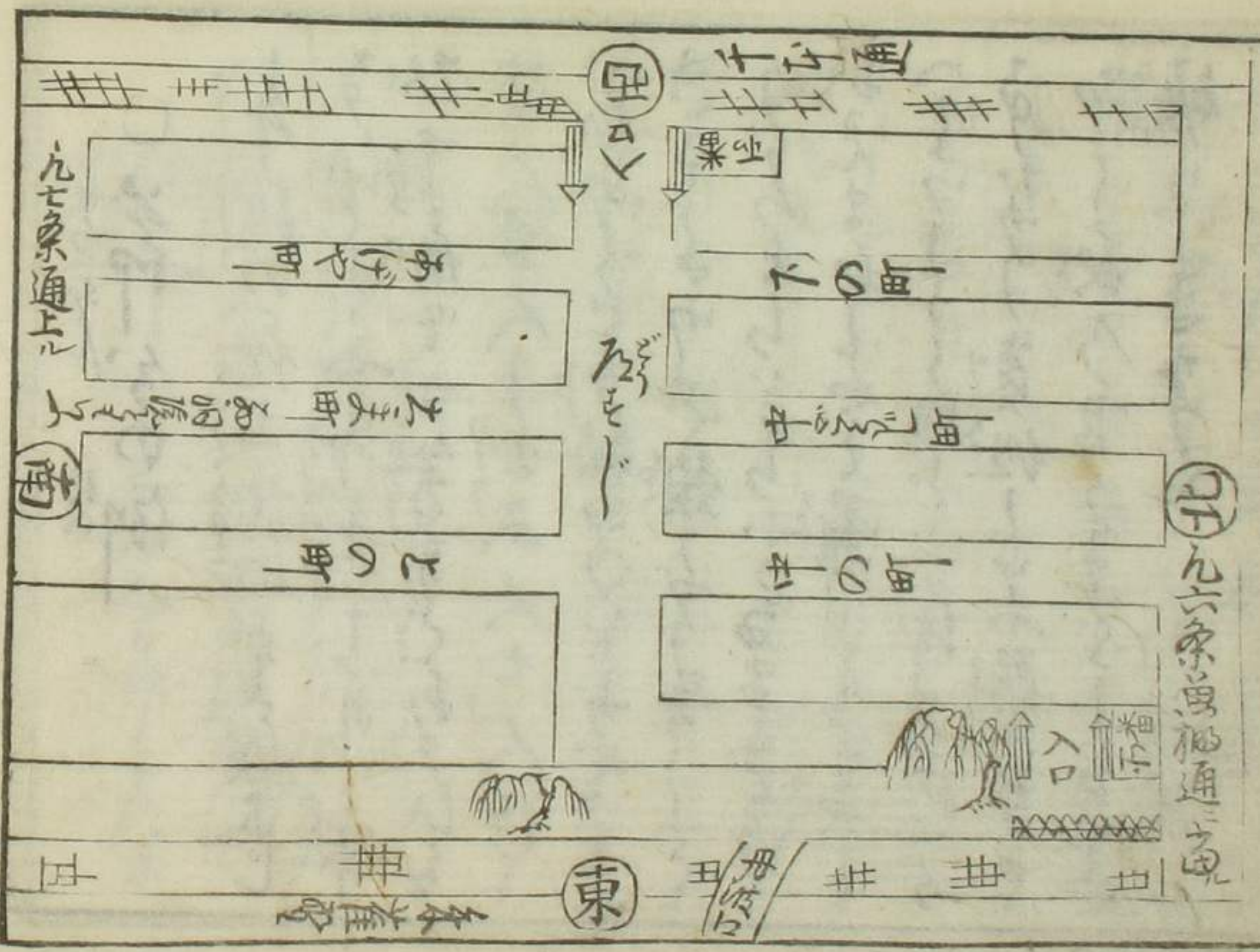
但しつ手出といふに  
ゆりうぐ大神あそみ夫  
神がるまふのりもはらひ  
能くよりあつたはるな  
年ごと

○ 節分の例

年越の夜去就のちぬまじ  
るいとく女帝亮まか、  
中居下女名もあつた  
十人廿人か又人七人  
いあせる報かひとあう  
きもぐやと類ぶうあ  
うごらとらうらふうまご  
あんまいしと報しとあ  
つらううとあつたあ  
りあう、  
あつたあ、  
あつたあ、  
あつたあ、




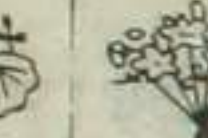

都賀原方角陰景



○名とせの初養定級

上の町あり角 桔梗屋治分

○おまの分

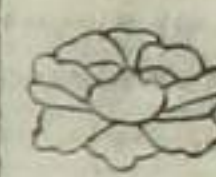
	ふくらほ	STAND こらん	うひ女 あひそ
	うひの	やんた 小せく	おぢの このん
	あがの	かよ らこ	さつ の
	あいの	かよ らこ	さつ の
	あいの	かよ らこ	さつ の
	あいの	かよ らこ	さつ の
	あいの	かよ らこ	さつ の





みづき

みづき



みづき

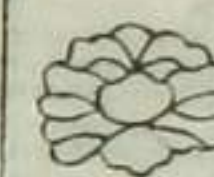
みづき



みづき

みづき

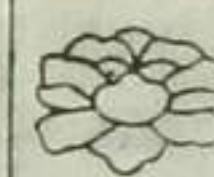
○天神のみ



みづき

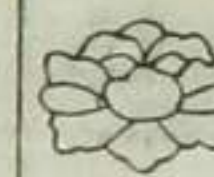
みづき

みづき



みづき

みづき



みづき

みづき



みづき

みづき



みづき

みづき



みづき

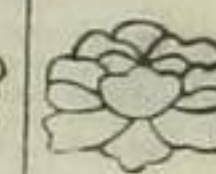
みづき



みづき

みづき

○姫女御のみ



みづき



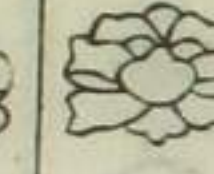
みづき



みづき



みづき



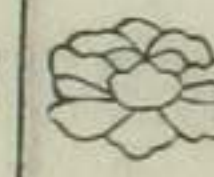
みづき



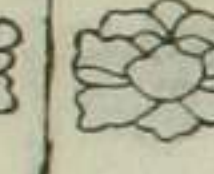
みづき



みづき



みづき



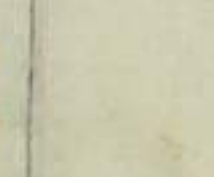
みづき



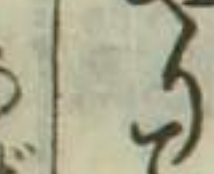
みづき



みづき



みづき



みづき



みづき


みづき

みづき



○おまのち

 *おまのち* Shiro *おまのち*


 *おまのち* やぶ *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

○天神のち

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

○おまのち

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

 *おまのち* おまのち *おまのち*

*おまのち* おまのち *おまのち*

中の町 おまのち

おまのち おまのち



○五まの分

 かたを本 ひきこ そめ川 おごく

○天神の分

 花どの うら 志のぶ

 ともなり 小こい

 あぶらち ま きん

 大ぬこ みまのみ

 ふうしん 子の分

 いらつもの あやと

○くろくまの分

あやと

ひきこ

うら

ま


みまのみ

子の分

あやと

 なまろと

 みまの

 ういね

 めい

あやと


中の町やがら  
一  
小一

○おまの分

 小ちま ひま いつ えん

 しん ひま こ えん

○天神の分

 いろは ひま ら えん

 ひみち ひま ら えん





くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ

○くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



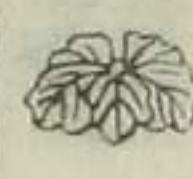
くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



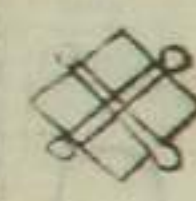
くろくろ

くろくろ

トの町みぐ

括弧内

○天神の台



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ



くろくろ

くろくろ





とんぼ

とんぼの



まげやま

まげの

○くまの分



くまやま

くまの



まき



まきの



ふた



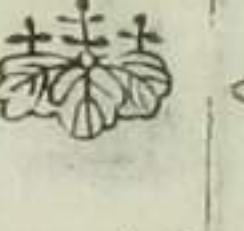
ふたの



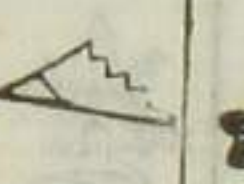
かん



かんの



まぢや



まぢの



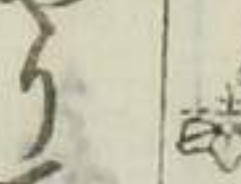
まん



まんの



ま



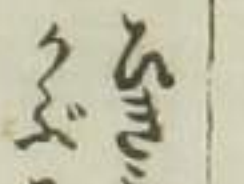
まの

をま所じがく 二つんを分

○をまの分



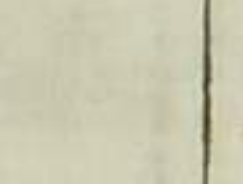
しく



しくの



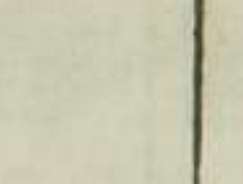
まの



まの



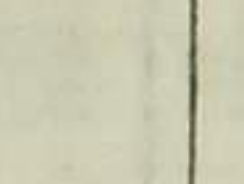
ま



まの



ま

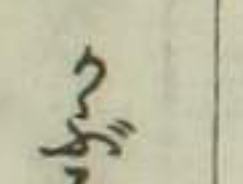


まの

○天神の分



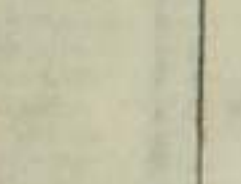
ま



まの



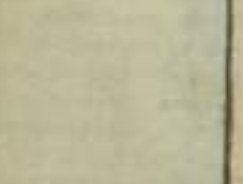
ま



まの



ま



まの



	みらーぶ	いまる
	あづま	ほろ
	そのし	いづの
	みらせ	いよ
	いよう	いよの
	いそわ	ひらや
	ちせ	かん
	りう	いそ
	あま	あま

○いそあまのか

	あま	あま
	いそ	あま
	み	いそ
	あま	あま
	いそ	あま
	あま	あま
	あま	あま
	あま	あま

○あまのか

中々いそあま

いそあま



 小じぎの こぢぎの

○天神の分

 ろふいづ ろふいづ

 ろあじ ろあじ

 ろい ろい

○くまらうの分

 うしぎ うしぎ

 こぎ こぎ

 とと とと

 まの まの

こぢぎの

ろふいづ

ろあじ

ろい

うしぎ

こぎ


とと

まの

やせ たま


中ぎし町が 中ぎし町が

○くまらうの分

 ろくま ろくま

 ろい ろい

 ろい ろい

 ろい ろい

中の町が 大黒利

○くまらうの分

 ろい ろい

こぢぎの

ろふいづ

ろあじ

ろい

うしぎ

こぎ

とと

まの

やせ たま


中ぎし町が 中ぎし町が

○くまらうの分

 ろくま ろくま

 ろい ろい

 ろい ろい

 ろい ろい

中の町が 大黒利

○くまらうの分

 ろい ろい





まごの



いざこ

↑の町びきり角

毎屋赤巻



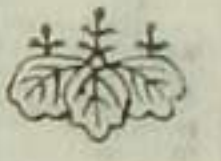
げらち



ざんご

中の町みがい

じらびりかよ



まごこ



こごり

左ま町みがい

るさる利き場



まごの



まごこ



まごの

中の町みがい

丹波屋三郎

○ 女らるの



うぐす



ころも

○ あげ屋のみ

楽あ  
合十九彩

△ ひがのの



俳名  
花桂

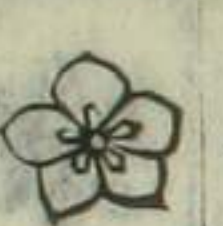
松屋新介



美屋たみ



二文字屋み



青苔  
指梗屋辰七



おどり場



錦嶺橋屋辰六





くわん

去所



曾庸 溢屋全屋



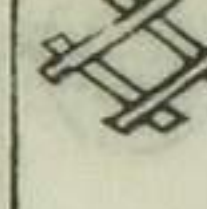
くわん



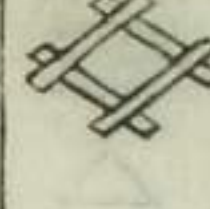
其雷 かばる夜屋



くわん



并角屋大



百圃 并角屋新屋



くわん

四地 丸田屋新屋



拍屋室在落門

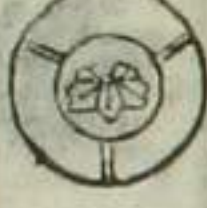
△少がいの分 丸新



琴来 角屋浪屋



くわん



芋丹 并屋本九郎



くわん



山形屋新屋



くわん



菊步 八文字屋新屋



斜天 石川屋新屋





くわいやく



柘雨 二文字 彦彦彦彦



くわいやく 町ん



馬良 花び 彦彦彦彦



くわいやく ほ子



鶴舎 彦彦新七



くわいやく ぢめ



復明 彦彦又彦彦



○ 彦彦の分 ナニ形 四一形やナニ



中の町 十千一文字彦彦彦彦



上の町 彦彦 坤者 留彦彦彦彦彦



彦彦 大和彦彦彦彦



彦彦 八文字彦彦彦彦



彦彦 平野彦彦彦彦



彦彦 彦彦彦彦彦彦



彦彦 海彦彦彦彦彦



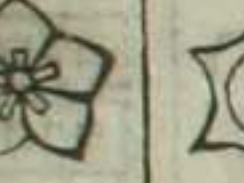
彦彦 竹彦彦彦彦彦



彦彦 休 大津彦彦彦彦



彦彦 彦彦彦彦彦彦

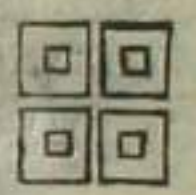


彦彦 大和彦彦彦彦



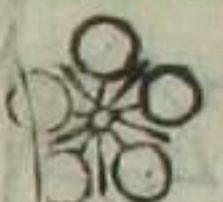
彦彦 彦彦彦彦彦彦





日

八幡屋



下の町  
よりの

蛸子屋

○くつどの分

蛸子屋  
七郎



香柳 栞棟屋



風羊 大坂屋



銀漢 一文字屋



蘭虎 一文字屋



呂口 栞棟屋



琴泉 三文字屋



山 山本屋



○くつどの分

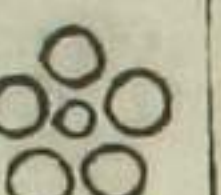
蛸子屋  
七郎



露屋



大里屋



龜屋



蛸子屋



大坂屋



井筒屋

○くつどの分

蛸子屋

○くつどの分

蛸子屋

○くつどの分

蛸子屋



くろいふお

石ま揚枝

かむら

丹波

石ま揚枝

○内番

东口

石口

内番

以上

撰者

斜天

右獅

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

きらび

あまの

うら

あま

あま

あま

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.











